

新・平家物語 (六)



吉川英治全集

第38卷

編纂委員

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作權者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・38

新・平家物語(六)

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式講談社

東京都文京区音羽二二二(大代表)
電話東京九四二局二二二
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特漉

第一刷発行 昭和四十三年一月二十日

定価 六百八十円

© 一九六八年 吉川英治

目次

壇の浦の巻(つづき)	三
悲弟の巻	四七
静の巻	一九二
吉野雛の巻	三七
完結のことば	四六五

新・平家物語
(六)

壇ノ浦の巻（つづき）

世間新色

おととい、きのう、そしてきょう。

一切が嘘みたいな気をするきょうの太陽であった。

町は町の物音を懸（か）らせてい、どこかに隠れていた老幼男女も、長い悪夢の門から人里へ帰って来た。そしてにわかな平和を、まばゆげに「もう殺し合いはない世間か否か？」を、どこかまだ、おたがいの姿に、嗅ぎあっている風でもあった。

あれほどな平家がどこにもあとかたはない。一片の紅旗も海に見えなかった。けれど、その壇ノ浦の沖が、まるで地獄の不知火（しじま）となって、幾十幾百か知れぬ炎の船が、遠くの浦うらからさえ、面を焼かれるほどあざらかに見えた終戦当夜の夜半過ぎごろから、陸地のここかしこでは、もう、いろいろな風説が飛んでいたのである。

『泳ぎついた平家武者が、山の方へ逃げこんで行った』

『いや、町屋の内へも、潜り込んだらしいぞ。空家やら、社の森へ』

そうしたおびえた夜が明けて、次の日もまた、墨のように降

りつづいた晩春の雨の終日、うわさは、もっと、ひろがっていた。

『豊前の衆は、みな見ていたそう。——あの晩、大勢の平家人が、大小十幾艘もの帆を張って、大瀬戸から西の海外へ、逃げ落ちて行ったとか』

ある者がいえば、またある者は、

『それどころかよ、わしがこの眼で見たのは、もともと山な船数（たすけ）だった。しかも唐船までが交じっていたわさ。ちよūd、雨となり出したあの晩の夜半過ぎごろでの、豊後の東端（ひがし）から南へさして、落ちて行く影が、朧おぼろと、船幽霊（ぶねうり）かなんそのように見えたがな』

と、さも怪異でも見たようにいう。

なお、ほかにも、

平家の落人らが、相当な数で、小門（こかど）の山道づたいに裏日本へ抜けて行ったとか。あるいは、まだ壇ノ浦では合戦最中の黄昏（たふし）ごろ、早くも、戦場を離れた一船団が、大隅や薩摩の方へさして、遠く霞（かすみ）み去（さ）っていたとか、およそ飛説（ひせつ）さまざまである。

——だが、一日半夜の雨もあがって、終戦三日めのけさは、洗われたような天地の新色とともに、庶民の間の風説も、急に声をひそめてしまった。

代って、残党狩りのきびしい令が、つじつじの立札（たてふし）に明示（めいじ）されていた。見たようなことを、しゃべりちらしていた市（いち）人が、梶原殿の陣屋へひかれてゆき、さんざんな糾問（きうもん）をうけたとかいう事実もある。

それらのことが、かれらをひたと啞（おどろ）にさせた。そして源氏に對しては、理窟（りく）なしの盲従（めうじゆ）と作り愛想（あいしやう）するように育てていた。——とまれ町の呼吸（こき）も、かつての平家色の懸（か）りではなく、東国弁（とうこくべん）の東国武者（とうこくむしゃ）が大手を振っての、し歩く鎌倉（かまくら）風の繁昌（はんさう）

に、一夜で変わったことだった。

『さて鼻どの。どうする、これから先?』

『どうも、こうも、ありはせぬ。なんでもにわかな思案がつこうぞ。まさか、こんな終わりになろうとは思えもせんんだ』

『が、いつまで、ここに腰を抜かしてもおられまいし』

『まったく、腰が抜けたとは、このことか。ああ、平家に賭けてきた年来の物心すべて水の泡だ。この大損は、もう取り返す所がない』

『だが、平家とともに、おぬしも一代、栄えて来た身、ともだおれと嘆くが、もともとになったと思えば』

『ばかをいえ、吉次』

鼻は、その鼻に朱を噴いて怒った。

が、すぐ悄然として、

『平家は平家、おれはおれ、おれの一代は、終わってなどいるものか』

と、つぶやいた。

ここは臨海館址の、例の崖の小事。

高地なので、おとといの海戦は、いながら見えたことだらう。たしかに、それまでは、酒をのみつつ、戯れ口たたいで、源平の成り行きを、高見の見物でいたこのふりだった。

きょうになっても、朱鼻の伴トはまだなんども「……まさか」と口癖みたいにもらしつつづけているが、全く、まさかあれほどの平家が、一日一夜のまに、あとかたもなく、滅び消えてしまおうとは、思えもしなかったに相違ない。

吉次も、がっかりしたことは、おなじである。

こう急転直下、平和となつてしまつては、鼻とともに、人並

みはずれな巨富を考えていたことも、一応、われに返ってみるほかはない。

さし当って、吉次の方針は、さつそく足ごしらえをし直して、奥州へ立ち帰り、屋島以来の見聞を、主君秀衡に報告するの他はない。

あとの私行は、己れさえ口を拭ければ、世間からぼろの出るはずはなからう。秀衡からも「長年、大儀であつた」と、ねぎらわれるくらいが落ちで、格別な恩賞もまず無いものとあきらめる。帰するところ、数年のあぐせくも、むだ骨おりというわけだ。多少、主家の立場を益した点はあるが、かれ個人の決算としては、虻蜂とらずで、利も得もない。「ばかな目に……」と、愚痴も思うが、命あつての物種とも考えられる。

——で、帰国のうへは、主君や郷党どもへも、主命一途に、源平両軍の顛末を、つぶさに見届けて参つて候う、と復命し、ほかは何事も取り澄まして、知らぬ顔をしているに如くはない——と、吉次は肚をきめてしまった。

だが、あわれなのは、鼻である。

平家を亡つたかれは、この世を失つたも同じだった。寄生していた主体が生命を失えば、多年主体を触つていたかれも同時に終わるのは極めて自然なことではかない。

しかし、その当りまえのことに、かれは今さらのように仰天したのだ。おとといの晩以来、鼻は、日ごろの剛復らしい容体もまったく無い、飲んでも、一こう酔わなかった。きのうは一日中のじとじと雨に腐りきり、きょうの快晴をながめても、この薄暗い妖窟から、出ようともしないかれであつた。

かれは、位階と権勢を、嘲笑つてきた。「そんな物は……」と、財力を誇つてきた。だが一朝にそれを失うと、財力にのみ頼つていた人間もまた、位階権勢から墜落した人びとと少しも

変らないもろさを自分に見てしまった。身の置き場にさえ、今は、安心な行く先を、どこにも持っていないのである。

『ともかく、そつと、浜辺や町屋の様子を見て歩こう。ふと、よい思案が出ぬものでもない』

これは吉次の誘いだつた。

もちろん、鼻も否やはない。屋島から移して来た多少の財物がここに匿してあるので、侍童の蟹丸に留守番をさせ、ふたりは姿を窺して、やがて山を下りて行った。

飛説さまざま

ひどい変わり方である。堰を開かれた水が、本来の水の相に返つて、生々とわか流れ出したあの飲びとちがわな。

赤間ヶ関の埠頭には、もう文字ヶ関とのあいだに、便船の通いがゆるされてい、男女の旅人が群れていた。

船止めのため、公私の往来すべて、十日以上も断たれていたのに、混雑は一そつだつた。

もうそこへ、旅人目あての、たくさんな物売りがたかっている。何よりは食べ物だつた。食物となら、旅人の持つどんな高貴な品とも交換ができた。近郷から青い物や穀物を担って出て来たらしい百姓まで見える。——まだ出ていないのは、酒と花売り女だけだつた。

『なあ、鼻どの。出て見れば、案外な世間じゃないか』

『うむ。当分はあのかくれ家から、一步も出られぬ氣もした

が』

『この人通りだし、人間も雑多だ。たれ怪しむ者はない。ただ脛に傷持つ顔つきを、こつちが人に見せなければ』

町屋も、あらかた商いの棚を開いていた。ただ子どもをしかる女が「この餓鬼よ、いうことをきかんと、東の武者衆に、くられてしまうぞ」と、喚んでいるのを聞き、伴卜は、ちよつと、ぎよつとしたようだつた。

それと、つじの立札に——「およそ平家に縁ある者と見かけたらすぐ届け出よ。匿まう者は斬に処す」とある残党狩りの令を横目で読んだときも、鼻は、なんともいえぬ顔をした。

『浜へ行こう』

急にかれからいい出して、磯へ出た。

ところが、その辺から壇ノ浦には、まだ、おとといの血をそでに干乾びさせている武者輩が、浜への諸所に屯している、海には無数の兵船や小舟の影が、依然、捜海をつづけていた。それも合戦直後は、武者ばかりであつたが、きょうあたりは、浦うらの漁夫漁舟が狩り出され、ここの海底になれている海女も使つて、みかどの御遺骸と、失われた二品の神器とを、——たとえ、千尋の底の藻草をかき分けても捜し求めよ」という厳命のもとに、夜昼なく、必死な作業が行われていた。

うららかなのは、浜添いの小高い丘陵のあちこちに、群れをなして、それを見物している磯焦けした老幼男女の顔だつた。

『何か、海の底から揚がったかね』

吉次は、旅人かなんぞのように、まわりの顔を見てたずねた。

『きのうの、あんな雨の中でも、たくさんな海女が潜ったり、鈎や網をひいていたそうだが』

『……………』

何を訊いても、そこらの顔は、ぼかんとしていた。黙って、顔を横に振るだけである。

ほかへ行ってみると、そこには、ほんとの旅人の一群れやら土地の僧侶だの船持ちの主らしいものもたずんでいた。そのひそひそ声に交じって、吉次と伴卜も、うわさの相槌を打ち、いろんなことを耳にした。

平家方では、たれたれが入水し、たれたれが討ち死にし、またたれたれが生捕りになったというようなこと。

雑兵の死者傷負いは、数も知れないほどだが、対岸の文字ヶ関にも、一冊いの捕虜小屋が建ち、赤間の数カ所にも、虜囚の柵ができて、やがては皆、斬られるのではないかと、そこの人びとはいつていた。

けれど、入水、討ち死に、生捕り、降参人の数などは、まだまだ、平家全体からみれば、極く少ない数ではない。それらをあわせたよりは、十数倍も多いはずの人間は、いったい、どこへ逃げ落ちてしまったものか？

ここでも、そんな怪しみが、ふと、ささやかれた。
『ひょっとしたら、おいとけない天子様も、一門の衆に守られて、どこか遠い人界の果てへでも？……』

うっかり、口にもらしかけた者も、急に口をつぐみ、辺りの顔も「叱ッ」と、たしなめるような眼つきをしまった。

そのくせ、海と空の遠くを見つ、かれらの眸は、それが架空な風説でなく、本当なことであって欲しいような、祈りに似たものを、皆たたえていた。

小さい軒のきの灯もこよいは戦さのやみを無くしていた。久しぶりに、わが家の中で手足を伸ばして眠れようぞと、常に

は、なんとも感じなかった平和というものを、しみじみ、家毎の夕煙りや夕餉を囲む顔が味わい合っているような世間であった。

とつぜん、わらわらと、はやい發音が、どこか町の一角に起こり出している。

まだ、おびえ辭を残している人びとは、すぐ、はっと耳をすました。

『首斬りがある』

『数珠つなぎにされた平家武者が、喚きわめき、首斬り場へ、追われて行った』

それを見にゆく群衆の声だろうか。口ぐちの声も飛んでゆく。

人の心を温めていた夕靄までが、たちどころに黒い血ぐさいものに変った。家いへの顔は、かなしげに色を失い「ああ、まだ世の中は、本当には……」と、不安のおのきを新たにした。

その夕べ、つじの空地では、平家の雑兵幾十人かが、いとも無造作に斬罪となった。

手を下したのは、梶原殿の部下であり、梶原殿は、今夕だけでなく、名もない端武者の捕虜は、つぎつぎに斬ってしまう御方針であろうと、もっぱらな評判だった。

事実、きのうも雨の中で、数十人の捕われが、ここで斬られたものだという。雑武者なので、首も梃けず、死骸は大きな坑へでもすぐ蹴込んでしまうものとみえる。一瞬の刃音や、断末魔の声は、なんとも、凄愴な氣をやみに吹きただよわせた。がたちまち、源氏武者の誇った笑い声や鎧の音が、うろつく群衆を叱り飛ばしながら、夕飯前の一仕事でもすましたように、さっさと、引き揚げて行くのだった。

『おい、行こうぞ。つまらぬ物を、見てしまったわい。』
鼻は、連れの吉次をうながして、人混みから抜け出した。

その日、串崎辺りまで、戦後の様子を見て歩き、もとの塀へ、帰って来た途中である。歩きあるき、鼻は思案顔を持ちつづけていたが、やがてのこと。

『おりいて、頼みがあるが、なにときいてくれまいか』

『おれにか』

『おぬしを、男と見込んで』

『この吉次にできることなら』

『当分の間でいい。おれを陸奥へ連れて行ってくれまいか。平泉のおぬしの館へ、この伴トをかくまって欲しいのだ』

『いとやすいこと、承知した』

『ありがた。きのうから、さまざま考えあぐねたが、この塩梅じゃあ、世も源氏となった陽の下に、平家と名のつく者、平家を扶けた者などは、ひとりも生かしてはおかれまい』

『まず、そう思えば、間違ひなからう。何十年も日蔭者の恨みを抱いていた源氏が天下の権を握ったのだ、あの頼朝のやることだ。これまでの世に見なかつたような、思いきったことが、行われるかも知れない』

『都返りも危いし、四国、中国、九州とて、寸土も余さず、関東御家人の支配に代るだろう。……十年前は、平家に非ずんば人に非ず、といわれたものだが』

『そうだ、その逆になる』

『とすれば、陸奥のほか、身をかくす所はない。……頼む、たのむ。とはいえおれも朱鼻の伴トだ。このまま朽ち果ててよいものか。いずれは奥州藤原家と鎌倉の頼朝との間も、いつまで無事でいるはずはない。藤原家の扶けもし、おぬしの片腕にもなろうじゃないか』

『よいとも。さすが鼻どの。そう肚をきめたとあれば、ひきうけた』

いつか、道は山坂へかかっていった。が、ふたりは急に、足をすくめた。——一つの灯さえ無いはずの臨海館址に、どういうわけか、たくさん灯が棟むねにともつてい、何か人騒めきまでが、まったく、いつもの夜とは違っていたからである。

『や、いぶかしいぞ。油断がならぬ。鼻どの、おぬしはここで待っている。様子を見て来る』

吉次はかれをおいて、例の、崖の亭よりも上の方へ、ただひとり、よじ登って行つた。

壊す人びと建てる人びと

戦さはまだ終わっていない。——少なくとも、義経にとっては事実そうであった。

ついに、入水された幼帝の御遺骸もまだ見つからず、海底と思われる神器三種のうちの二品も、いまだに捜し当らない。

『軍には勝つたりとて、なんの手柄』

と、かれは麾下へも強くいった。もちろん、自責の言ではある。

かれはあれ以来、具足を解いて寝てもいいない。昼夜の捜海を、船上から督しながら、一面にはなお当然な、戦後の急務も山ほどあった。

陸上の治安と、何百人にのぼる雑兵の生捕りなどは、これを

梶原の手にゆだねたが、しかし義経としては心もとない何かを抱いていたのであろう。——海中から救いまいらせた建礼門院や前内大臣宗盛などの一門の捕虜と、女房たちの群れは、自身の手で、ひとまず彦島へ送り、かつての仮御所の内に封じて、その守りも、直臣にあたらせていた。

また、何よりも、急がれたのは、この戦捷を、都と鎌倉へ、報じることであった。

院の後白河へも一通。

べつに、鎌倉の兄頼朝へも、心をこめた一状をしたため、同日に、飛脚を立たせた。

まだ、精細な調べもつかないので、ざっとではあったが、それには、生捕り人、降人、戦死など、平家方の主なる者の名だけが書き上げられていた。

その、生捕り人名簿には、

前内大臣宗盛

子息、右衛門督清宗

を筆頭に、

平大納言時忠 嫡子、讃岐中將時実

二位の僧都専親 内蔵頭信基

法勝寺の能円 主馬判官平信国

美濃前司則清 藤内左衛門尉信康

源大夫判官季康 摂津判官守澄

兵部少輔尹明 中納言の律師仲快

内府子息ノ童形八歳、字副将丸

など、三十八人が列記された。そのほか、海や女房船から助けられて、生存者中になお名の見える女性たちには——建礼門院をはじめ、

北ノ政所

藤ノ御方

大納言佐ノ局

治部卿ノ局

帥ノ局

などがあり、女人の捕われのみでも、総数四十三人と註された。

また、入水、自害、行方知れずの人びとには、

幼帝

八条院

中納言教盛

権中納言知盛

修理大夫経盛

能登守教経

などの名が書き上げられたが、しかし、以下の数は不明とされた。さらにまた、衆目の中で、討ち死にをとげたと見られた者には、

左馬頭行盛

小松新三位中将資盛

同じく少将有盛

権藤内貞綱、貞重兄弟

備中吉備津ノ神主

などの名があった。

以上のほか、敵の死せる者八百余人、雑兵の捕虜は、数知れずとし、また、降参人の主なる将としては、筑紫の松浦党や原田党や、四国の阿波民部の名もいつていた。

しかし、平大納言父子までが、生捕りの簿に入れられているのは、どうしたわけか。前後のいきさつ、一応、そうしなければならぬ事情にあったためか。きのうの裏面は、すべて義経

が一存に行われてい、いちいち鎌倉殿の意を仰いだことではない。同陣の軍監梶原すらも、全然知っていないことだ。で、時忠父子の扱いには、微妙な心づかいを要し、義経ひとり、何かを腐心していた様子がみえる。

ともあれ、義経の心身は、形をかえた忙しさに責められていた。

——で、今宵だけは、せめて一睡でもと心に願ひ、きょうも空しかった捜海の沖から、たそがれ早目に、彦島へ船を返して来たのだった。

が、その小憩も、ゆるされないことができた。

というのは、思いがけない奈良の使僧と、院の一公卿が、はるばる都から下って来、その日、彦島でかれを待ちわびていたのである。

公卿は、宮内権少輔親経で、連れの奈良法師とともに、東大寺の大仏再建の工に当たっている造大仏使左少弁藤原行隆の下にいる者だと告げた。

で、行隆から義経あての書状、また、院の下文も、携えており、それをして、

『渡来船一隻に、食糧万端の物を載せ、急いで、お調べ給わりたい』

と、いうのであった。

あれはもう六年前。——治承四年の年暮であった。

清盛の死んだその春先のつい数ヵ月前のこと。

奈良の東大寺、興福寺、大仏殿など、みな灰燼になった。

平家の軍兵が放火したのである。——そのおりの人將が、一ノ谷で捕われて、後に鎌倉へひかれた平重衡であったのは、

今さらここでいうまでもない。

また、その年以後の大飢饉、木曾の蜂起、諸国のみだれ、洛中の暗黒状態、やがてまた、平家一門が都落ちの業火やら宇治川、一ノ谷の合戦と、明け暮れもない地上の騒ぎもいうまでもない。

まるで、地獄の数年だった。世をあげて人は暗夜行路の思いに寿命をちぢめてきた。

ところが、今。

義経は、はるばる奈良から来たふたりの使者を前に、かれらの語るところを聞いて、じつに意外な思いに打たれずにいられた。

そんな地獄の歳月と修羅のちまたにありながら、ある一部の人びとは、治承の年に焼亡したあの巨大な大仏を、聖武帝が建立された当初のすがたに還そうという願望をたて、一日もたゆまず、再建の勸進と工をすすめていたというのである。

もちろん、後白河法皇の発唱である。

とかく政略すぎな——またそのための犠牲者などほんとも思われない冷酷、無節操な法皇——とも観られて、しばしば、あの清盛をも怒らせ、清盛とも火花をちらすような肚の闊いになされたものだが、さても後白河とは、驚くべきお人である。底知れないお人柄ではあると、義経は今、使者たちの話を聞いて、いるうちに、おそろしいほど、それを感じた。

自分たちは、ここ幾年を、天下の分け目とも、開闢以来の大乱とも考えていたのに、院にあつては、もう一方で、平和の日のために、そんな大事業の勸進を、着々すすめていたのであったか。

なんたる、大きな眼、緋々たる余裕だろうか、と舌を巻かずにいられない。

——使者たちの話を、なお聞けばきくほど、いよいよ驚かれるばかりだった。

大仏再建の命は、初め、法然上人へ下されたが、法然が辞して、

『重源こそ、その任の人』

と、薦めたので、当時六十一歳の智識重源上人に、除目、宣旨が下ったものだという。

重源は、宋国へ三度も渡航している。そして宋の育王山では伽藍建築にも従事した経験がある。衆望は厚く、意志はつよい。——造大仏使長官の行隆とともに、一山を督し、七道諸国に、僧を派して「——一紙半銭の奉加、尺布寸鉄の寄進なり」と、大仏再建のため、喜捨なし給え」と、勧進してまわらせた。

かれみずからも、老驢を一輪車に乗せ、道俗男女のあいだを、暇があれば、説いて歩いた。

そして寿永二年の春に、まず大仏の御首を鑄始め、次に右手、次に左手と、年々難事業もすすみ、ついに去年の秋をもって、仏体の総仕上げ、鍍金から研磨も完了を告げたというのである。

その工費や鍍金の料には、頼朝から米一万石、絹一千疋、沙金一千両が寄進され、また奥州の秀衡からは、沙金五千両の合力があったという。

だが、直接の工に当って、鑄造の指揮をした功労者は、宋の巨匠、陳和卿という宋人であった。

鑄物の技ばかりでなく、陳和卿は、伽藍建築にもあかるいので、かれのみはなお、奈良にとどまり、つづいて大仏殿の普請の設計にあたっている。

だが、数年前に、かれが自国からつれて来た宋人鑄物師七十

余人のうちには、もう、望郷の念にかられ、しきりに帰りたい者も多い。で、約半数以上が、ひとまず、帰国の途について来たのだった。

『……はや、多くを申すまでもありませんねが』

と、使者の親経は、終わりにいいたし。

『それらの、宋人たちは、みな大功ある工匠ゆえ、院も厚くおねがらいのうえ、多くの礼物など賜い、かつまた、われらに見送りの使節を命ぜられた次第です。で、この二月初め、都を立ち、周防の国境まで参ったところ、合戦のため、途はふさがれ、博多ノ津まで行くなどは、しよせん、覚つかなしと止められました。むなしく、赤間ヶ関の外にて待つこと十幾日、ようやく、戦さも熄んだと聞いたので、やれうれしやと、きょう赤間の町へはいって、ひとまず臨海館の址を宿所といし、一同休息いたしております』

『さても、お使大儀。さだめし途上多くの難渋を見たことでおわそう』

義経も心から、同情してこういった。

『——日ごろ、渡宋の役をする大宰府船をはじめ、筑紫の浦うらの船は、なべて合戦に狩り集められたゆえ、博多ノ津にも、おそらく巨船はありますまい。さっそく義経が手にて、軍中の唐船一艘を仕立て、米塩など万端な物も載せてまいらせる』

『やれ、おことばにて、ほんと致しました。御陣合のほど、いかがあるうと、憂い顔を寄せ合っている宋人たちも、それを聞いたら、涙をたれて、歎びましよう』

『御一同は、何人ほどか』

『宋国の人は、三十八名。ほかに都より連れ参った荷駄やら小者など、あわせて五十名ほどの同勢にござりまする』

『長途の旅のうえに、おりふしこの戦場のあと。さだめし異国

の人びとには、心細いことであろう。かつは食べ物やら夜具にも不便なことを察しやられる。さつそく義経自身、それへ臨んで、何かの指図、また何かと、慰めてもやりたいものよ」

思い立つと、かれは早い。

有綱、忠信、ほか十名ほどの郎党をつれ、ふたりの使者を先に、すぐ関の山手へ、急いで行つた。

が、それより先に、梶原の部下の手で、臨海館には、夜の灯が各所にもとまされてい、その異国の客は、ただ騒然と、渡航の船の吉左右だけを、待ちわびている様子であつた。

現 と 夢

義経は、臨海館にはいると、さつそく、宋人鑄物師の一行のうちから主な物三、四名をよび出した。そして親しくかれらの仲間へ、

『渡宋の船は、明朝、赤間の埠頭に相違なく寄せて進ぜる。この戦さにさえぎられ、帰国の途を十数日も国境にて、足止めされていた由、まこと、気のどくなことであつたの。——が、安心せよ。あすは貴国へ船出ができれば。こよいは日本を去る名残りの一夜、心おきなく、休むがよい』

と、親経の訳語を通して、ねんごろに告げた。

宋人たちの歓声が、やがて奥の方で、揚がっていた。

院使親経や、奈良の使僧も、かれらの座に交じつて、ともどもよろこびあい、

『幸、よい大将がここにいたればこそ』と、義経の好意に感謝し、その徳を称えあつた。

梶原の部下も先に来ていたが、それは単に、一行の宋人へ雨露をしのぐ宿所と、冷たい監視を与えていただけにすぎない。

義経は積極的に、異国の文化をもたらし、今帰国するこの異国の労働者たちに、心から何かを見せてやりたいと思つた。

で、山下から酒や肴を運ばせて一行を慰め、また伊豆有綱を、沖なる伊勢三郎の許へやつて、

『分捕りの唐船一艘に、穀、野菜、塩、干魚などの食糧と、およそ五十人分の起臥の調度を載せ、明朝までに、赤間の船着きへ寄せておくように』

と、命を伝えさせた。

沖は今、神器の捜海に血まなこなさいである。これは並ならぬ厄介ごとにちがいない。と義経にも分かつていたが、あえて、急げと念を押してやつた。

こうしてかれはその晩も、つい一睡のひまもなかった。しかしさすがに疲れも出て、一応の指図をすますと、園の一亭に寄り懸り、ひとりうとうと居眠っていた。

するとどこかで、ただならぬ物音がした。

かれはふと眼をさまして「——喧嘩か」と、思った。部下の雑兵喧嘩はめずらしくない。

だが、物音は、まもなく止んだ。騒ぎがあつたのは、崖の中腹に倚っている一つの屋根の下らしく、やがてのこと、二十名以上の武士が、何かのしりのしり、義経のいた方へ、小道を分けて登つて来る。

かれらはにわかにこれへ来た梶原部下の残党狩りの兵らしかった。園の一亭に義経がいたことなどもより知ろうはずもない。どの顔も昂奮し、猛だしい眼をもっている容子が口ぐち